

双葉町復興町民委員会 町民コミュニティ部会 ワークショップ 第3回 報告書

- 日時 平成27年10月28日(水) 13:00~16:00
■場所 双葉町役場いわき事務所 2階大会議室
■参加者 別紙座席表のとおり
- テーマ 「出し合った課題について、議論を深めるテーマを決め、課題や解決策を考える」

■第1回で整理した課題の絞り込み

参加者は、残されたテーマである

- ・「2. 町民同士が連絡を取り合うことができる仕組みの構築」
- ・「3. 町からの情報提供の円滑化・充実化」
- ・「4. 双葉町の歴史・伝統・文化の記録と継承」
- ・「5. 避難先住民との交流促進」
- ・「6. 震災・事故の教訓の記録と伝承」
- ・「7. 教育環境の確保」

の2~7の課題の中から、重要と思われる3つを選択して、評価点を各1点として投票した。

その評価点をもとに、順位を付けたところ次のような結果となった。

第1位が「5. 避難先住民との交流促進」、

第2位が「2. 町民同士が連絡を取り合うことができる仕組みの構築」
「3. 町からの情報提供の円滑化・充実化」

第3位が「4. 双葉町の歴史・伝統・文化の記録と継承」

第3回にむけた論点整理

項目	論点	評価点	順位
2	町民同士が連絡を取り合うことができる仕組みの構築	9	2
3	町からの情報提供の円滑化・充実化		
4	双葉町の歴史・伝統・文化の記録と継承	5	3
5	避難先住民との交流促進	10	1
6	震災・事故の教訓の記録と伝承	4	
7	教育環境の確保	4	

■議論に参加するテーマの選択

上記の課題の絞り込みで第1位から第3位の合計3つのテーマに絞り込み、部会員の討議に参加したい希望を自己申告してもらった。その結果、次のようなグループに分かれてグループワークを行った。

グループ	検討テーマ	参加者
A	避難先住民との交流促進	渡邊、大橋、高田 斎藤、林、白岩
B	町民同士が連絡を取り合うことができる仕組みの構築 町からの情報提供の円滑化・充実化	岡村、松木
C	双葉町の歴史・伝統・文化の記録と継承	笠原、山本、行徳

■ワークショップ成果の発表

◇グループA

部会員：渡邊、大橋、高田、斎藤、林、白岩

テーマ：「避難先住民との交流促進」

発表の要点：

- いわき市のことをもっと知るために、交流を始めた。
- 個人で動けない人（移動）を支援するのが自治会の役割だ。
- 自治会・社協・NPOの役割を整理し、そこに支援員をうまく連携させる必要がある。
- 国から受入市町村へ負担金を出しているが、そのことを自治体は説明すべきだ。
- 柏崎市は避難者を見守ると決定し、NPOに委託して、各自治会と連携している。
- 自治会立ち上げのルール・規約・システムを作る必要がある。
- 都道府県単位で47人の支援員を派遣して状況を把握する。
- 支援員の仕事として、自治会組織の強化に取り組んでみる。

【カードに書かれた意見】

《地元自治会との交流》

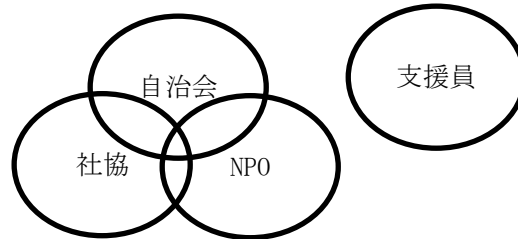
- 平七夕祭りで3年連続して飾りを作ったところ、喜ばれている（自治会）。
- いわき市薄磯地区自治会と交流を始めた（自治会同士の交流）。
- お世話になっているいわき市のことをもっと知るために、交流を始めた（バスで市内視察や県の予算を活用）。
- （県中）地元自治会と交流する機会がない（機会があった時でも、その時の手土産費用を自己負担している）。
- （小名浜の復興住宅）25戸中双葉町民が23戸。自治会活動はごみ拾いや草取りなど。一人暮らしと高齢者が多い。カフェが週2回ある。

《自治会は支援する個人がいる限り必要だ》

- 自治会の終わりは考えなくてよい。何もしなくても場を提供できるという良さが自治会にはある。サロンのなものだ。
- 個人で動けない人（行動するきっかけがない人）を支援する。
- 個人で動けない人（移動できない人）を支援する。
- 自治会活動は、生活が落ち着いてきて回数（会合）を減らしてきている。
- 一人ひとりの町民が自立すれば、自治会は自然消滅するのではないか。
- 自分は川越へ行くが、両親はいわき市の施設に入れることにした。

《自治会、社協、NPO、支援員の役割を整理する》

- 自治会・社協・NPO の役割を整理し、そこに支援員をうまく連携させる必要がある。



《柏崎では、市と NPO と自治会が連携してうまくいっている》

- 自治会は市役所市民活動支援課や NPO と連携できている。
- 柏崎市は避難者を見守ると決定して、NPO に委託している。
- せんだん双葉会（柏崎市）では、地域との交流を最小限にとどめている人が多い。
- 柏崎市での自治会加入は、100人から30人、38世帯から15世帯へ減少している。
- 柏崎市は祭りが多い地域で、祭りに行けば町民の参加状況がよくわかる。
- 柏崎市で「サマーチャレンジ」を開催して、双葉町民と柏崎市民が参加した。
- 柏崎市では、福島県から小学校教師が派遣されていて、子どもを見守っている。いじめ、不登校が少し目立ってきている。

《自治会づくりのルールを確立する》

- 国から受入市町村へ負担金を出しているが、そのことを自治体は住民に説明すべきである。
- 自治会立ち上げのルール・規約・システムを作る必要がある。
- 町のHPに自治会のページをつくるように要請して実現した(県中)。
- 町が自治会の立ち位置を明確にすべきだ。

《自治会組織強化の支援（復興支援員は組織強化を）》

- 都道府県単位で47人の支援員を派遣して状況を把握してはどうか。
- 支援員の仕事として、自治会組織の強化に取り組んでみてはどうか。

《自治会への財政支援（地域自治会との交流に支援を）》

- 地元自治会との交流費用が（補助金などで）負担されたらよい。
- 県の補助事業（自治会活動に地域との交流）を申請したところ、採択された。
- 自治会と避難先自治会とのパイプづくりを行政が支援する。

《カード記載以外の補足説明・感想等》

- 今日の意見を地元で聞いて、次の部会で意見を出したい。
- 町が各個人に自治会とはこういうものだというのを送る（文書配布や広報）が必要だ。
- 地元自治会から招待されたら、手ぶらで行くわけにはいかない。しかし、町に相談をしたら、首長からの招待文書でないとお金が出せないと言われた。資金面の支援が必要だ。

《サポーター補足》

- 柏崎市は仕組みができています。自治会にこだわらなくても活動できている。
- 避難者が全国に広まっているので、避難先自治体や避難先自治会とどのように連携するのが課題となる。

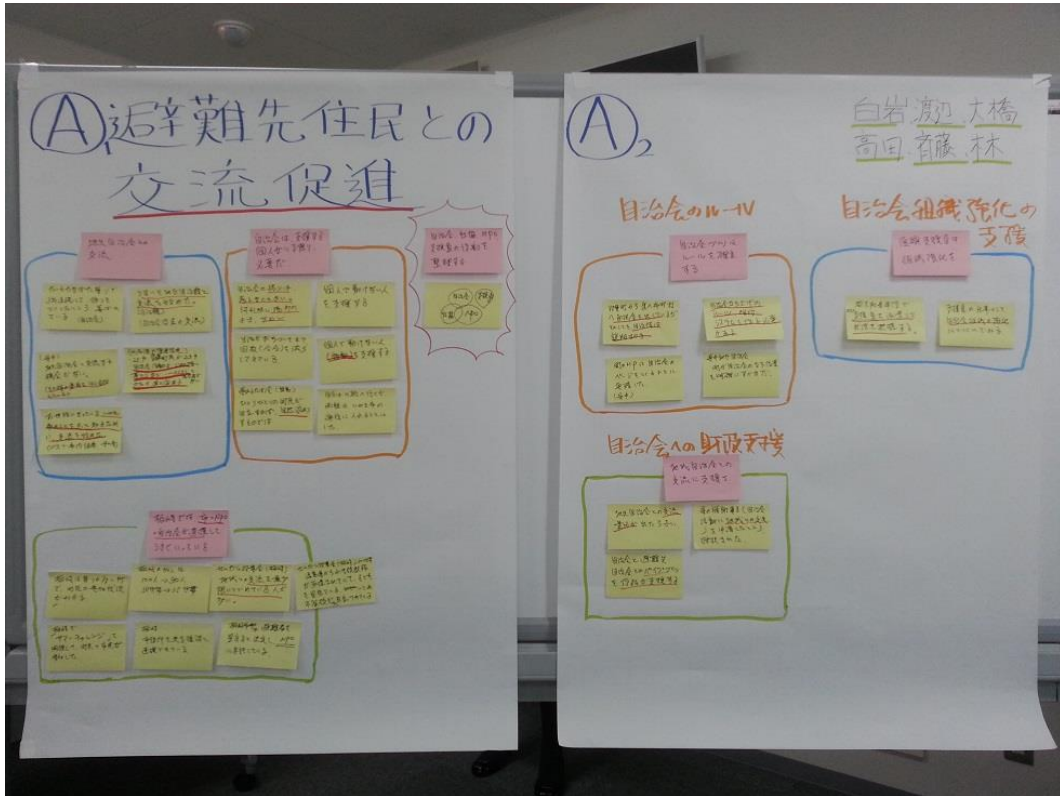
グループワークの様子



発表の様子



ワークショップの成果



◇グループB

部会員：岡村、松木

テーマ：「町民同士が連絡を取り合うことができる仕組みの構築」
「町からの情報提供等の円滑化・充実化」

発表の要点：

- SNS は、全員に公開するものと、幹部のみ、幹部以外など、限定公開するものに分けると良い。
- 同じ行政区の人とかけ合いするのが楽しい。
- タブレットの講習会の時間数を増やしてほしい。
- 好奇心をそそる（タブレットなどの）使い方を講習会で教えると良いのではないか。
- 電話でのやりとりの方がコミュニケーションを取りやすい。
- 込み入った話はタブレットではしにくい（書きにくい）。
- 町からの発信は、文字情報だけでなく、写真などを中心としたページを更新すると良いのではないか。
- 町からの情報発信だけでなく、町民からも情報発信していくと良い。
- 情報をもらうだけではコミュニティではない。

【カードに書かれた意見】

《タブレットのメリット》

- スマートフォンだと字が小さいが、タブレットは文字が大きく見やすく良い。
- 情報発信するツールは複数あった方が良い（タブレット・広報誌・その他）。
- 各避難先の間で交流できるサイトがほしい。
- 避難先自治会間での交流ができる SNS を整備すると良い。
- 自治会幹部以外の人同士で意見交換ができるサイトが欲しい。
- SNS は、全員に公開するものと、幹部のみ、幹部以外など、限定公開するものに分けると良いのではないか。

《タブレット活用状況》

- 現在 1,880 世帯に配布している（双葉町民約 7 割に普及）。
- 約 8 割が通信している（何かしらボタン押して見ている）。
- しかし、世帯ごとに配布だと、家族が多い家では使い勝手が悪いのではないか。
- きずなシステムが一番利用されている。
- コミュニティ広場のふるさと広場・行政区のページをよく利用している。
- 同じ行政区の人とかけ合いするのが楽しい。

《活用しない理由①》

- 最初は楽しくてよく使っていたが、よその行政区の人とかも入り、情報過多になり、書き込みを減らした。
- 他の行政区の方から非難的な投稿があり、自ら投稿する気が薄らいでくる。

《活用しない理由②》

- タブレットを置く場所がない（避難住宅が狭い場合）。
- タブレットより PC を見ている。
- 賠償問題の会議と一緒にタブレット講習会をしても頭に入りにくい。
- タブレットの講習会の時間数を増やしてほしい。
- 1回の講習会ではタブレットが使えない。
- 好奇心をそそる（タブレットなどの）使い方を講習会で教えると良いのではないか。

《タブレットを利用しなくてもリアルコミュニケーションが充実している》

- 電話でのやりとりの方がコミュニケーションを取りやすい。
- 他の避難先町民ともよく交流しているので、タブレットを見なくても情報が入ってくる。
- 携帯がかけ放題（電話）なので、タブレットの使用頻度が低くなる。
- 込み入った話はタブレットではしにくい（書きにくい）。

《どのような情報だと見たくなるか》

- 町からの発信は、文字情報だけでなく、写真などを中心としたページを更新すると良いのではないか。

《町の HP の見やすさについて》

- 通り一遍のお知らせだけでは、町の HP を見なくなる。
- 町の HP などへ痒い所に手が届くような情報を載せて欲しい（例：町の住居変更などに伴う情報など）。
- 町の HP は言葉ではなく中身が重要。

《どのようなネットワークだと良いか》

- 幹部又は幹部以外などの交流者を限定したつながりも作ってはどうか。
- 普段は SNS で連絡をとったとしても、最低でも 3 か月に 1 回は、フェイストゥフェイスで町民同士会いたい。

《双方向の情報必要》

- フェイスブックで、イベント作成機能を利用して、町民からイベント告知をすることも可能だ。

- 町からの情報発信だけではなく、町民からも情報発信していくと良い。
- 「ふたばのわ」にも町民からの情報を載せてほしい。
- 情報をもらうだけではコミュニティではない。

《カード記載以外の補足説明・感想等》

- タブレットの活用の仕方、情報収集が変わってくる。
- 電話とか直接の話のほうが連絡を取りやすい。タブレット（SNS）はワンクッションあって遅い。
- タブレットの講習会が2時間では短いのではないか。
- 文字情報は避けられている。写真が良い。
- 町によるもっときめ細やかな情報発信が必要だ。
- LINE を使ったテレビ電話をやってみようと思う。電話代はかからず利用できる。

《サポーター補足》

- 活用してもらうにはどうしたらいいかという話がでてきた。
- 使いやすさとかそのための講習会や見たいな情報が必要である。

グループワークの様子



発表の様子



ワークショップの成果



◇グループC

部会員：笠原、山本、行徳

テーマ：「双葉町の歴史・伝統・文化の記録と継承」

発表の要点：

- 話してくれる人たちをまとめる事務局があれば良い。
- 歴史ビデオを作って映像として子どもから大人まで見てもらう。
- 歴史民俗資料館の考え（どのように考えているのか）や町の歴史・伝統・文化の研究はどうなっているか。
- 芸能祭などで各地区同士が呼びあって、そこで何かできるはずだ。
- （ダルマ市の開催を）各地区が持ちまわるといい。
- いわき市と各地区が常に交流するのが良い。
- イベントに出たいが、ほかのイベントと重なって出られないことも多い。町には、行事を一覧表にして他のイベントと重ならないようにしてほしい。

【カードに書かれた意見】

■歴史の記録と継承

《学び》

- 核家族化でバラバラだ。大家族から小さくなった世帯の子どもたちへ、昔話をどこまで話することができるか。
- ふるさと双葉の昔話「ふたばの昔ばなし」「ふたばの昔ばなし続」の2冊を町民に配布している（読み聞かせ）。
- ふるさと双葉の昔話「ふたばの昔ばなし」の絵を小学校の子どもたちに書いてもらった。
- 紙芝居を昔話から作っている。これを利用できるのではないか。
- 県外各地で紙芝居をやっている。埼玉県やつくば市は読み聞かせをやっている。

《継承》

- いろんところで町史が見られると良い。
- 話してくれる人たちをまとめる事務局があれば良い。
- ナレーターを笠原さんで歴史ビデオを作って、映像として子どもから大人まで見てもらう。
- 双葉の歴史を語り継ぐのもよい（昔話の読み聞かせとは別に）。

《記録》

- 町史はレベルが高くとても良いものだが、（作成したのが）少し前の年次で古いので、最新版として見直して発行するのはどうか。
- 歴史民俗資料館の考え（どのように考えているのか）や町の歴史・

伝統・文化の研究はどうなっているか。

- お寺のお坊さんがいなくても町民がお寺を守っていた（例：仲禅寺、志賀直哉ゆかりの自性院）。いろんな逸話がある。これを語り継ぐ機会をつくる。
- 歴史とつながっていることを伝えていく。（例：モトケンダン・・・裁判所のような役所）

■ふるさと祭り～町民の声～

《祭りの活用》

- ダルマ市に来ているおばあちゃん、おじいちゃんから話を聞く（子ども達）。話したい人が多い。
- 芸能祭などで各地区同士が呼びあって、そこで何かできるはずだ。
- 中央盆踊りのような町の盆踊りがあった方が良い。
- ダルマ市の時に各地（県外）からバスが出た。多数集まった。
- （ダルマ市の開催を）各地区が持ちまわるといい。
- いわき市と各地区が常に交流するのが良い。
- ふるさと祭 2015in 南相馬で前沢女宝財踊が披露された。前沢女宝財踊のいわれを知ってもらい伝えていく。
- せんだん祭でせんだん太鼓を子ども達が披露する（学校全体で）。
- せんだん太鼓が他の祭りにどんどん出演していくと良い（今もいろいろ行っている）。
- 震災前の集団で芸能祭をやっている。1つの集団だけで参加するのではなく新しい人を取り入れる。
- 新しい集団で伝統芸能を守っていく。
- 夢ふたば人が芋煮会などのイベントを行っている。
- 実行委員会がしっかりしないといけない。
- ダルマ市実行委員会の考えを聞いてみたい（現状認識）。
- 町はどう考えて支援するのか（お金だけか）。

《カード記載以外の補足説明・感想等》

- イベントに出たいが、他のイベントと重なって出られないことも多い。町には、行事を一覧表にして他のイベントと重ならないようにしてほしい。
- 笠原さんのような方が、話ができる場ができないだろうか。
- ダルマ市に紙芝居のブースとかがあった方がいいのではないか。
- いろいろあるものを文書にまとめられないだろうか。

《サポーター補足》

- 歴史がつながっていることを伝えるのが大事。

- ビデオの活用が話し合いになった。タブレットも利用できるのではないか。

グループワークの様子



発表の様子



ワークショップの成果



◇学識経験者 間野先生からの講評

今日は三つのテーマであった。「避難先住民との交流促進」では、グループの大半が自治会の関係の方だったので、自治会の話になった。4年半経っても自治会としての課題がまだまだあると感じた。もう一つ大事なことは、柏崎市の例のように、自治会以外のところで、どう避難先の人とつながっていくのかという話をしていけないといけない。自治会が組織されているところも限られているので、それ以外の人をどうフォローするかについても課題である。

「情報提供」に関しては、タブレットについてもまだまだ工夫が必要である。また、タブレットに頼らない情報の受発信が課題で、特にタブレットを使わない人に対してどうやっていくのかを考えていく必要がある。

「歴史・伝統・文化の記録と継承」については、結論としては、いかに歴史・文化をきちっとおさえて伝えていくかというのが課題だ。歴史・文化の役割は二つある。まずは、避難している方々に双葉への愛着を持ってもらうことが非常に大きな役割である。高齢者の人が懐かしいと思うことも大事であるが、より大事なのは、子どもたちが歴史・文化を学んで、いずれ双葉に帰ろうと思ってもらうことだ。もう一つは、歴史・文化を皆で楽しむことが大事だ。避難している人にとっては、これが大きな心の支えになっていると思う。この二つの役割から分かるように、歴史・文化・伝統にはこのような側面がある。

今回の三つのテーマとも、コミュニティにつながっていけないといけない。長期化している避難生活の中では、コミュニティの維持発展も必要である。また、仮設住宅でのコミュニティが、持家の取得などで入居者が減ったことにより、だんだんと変化していくという転換期にきている。そのため、双葉町民の絆をどう維持していくかについて検討する必要がある。

今後は、このような課題への解決方法を提案していくような話し合いができれば良い。

第3回双葉町復興町民委員会 町民コミュニケーション部会座席表

資料2

- (敬称略)
- 1 日時 平成27年10月28日(水)13:00~16:00
 - 2 場所 双葉町役場いわき事務所 2階大会議室

荷物置き場

パネル

ワークセッションリーダー

アドバイザー	県立広島大学名誉教授 福島大学つくしまふくしま未来支援センター特任研究員 間野 博
オブザーバ	福島県生活拠点課 鷲海 潔 主任主査 福島県避難地域復興課 菅家 昭平 主査 教育総務課主幹兼指導主事 阿部 裕美 生活支援課長 志賀 睦 住民生活課総括主任主査 兼生活環境係長兼住民支援係長 井戸川 洋子 秘書広報課主査 石上 崇

ファシリテーター

グループA	白岩 寿夫 笠原 悦夫
グループB	山本 真理子 館林 孝男 (当日欠席)

ファシリテーター

グループB	大橋 庸一 渡邊 浩二
グループC	高田 秀文 岡村 隆夫

飲み物コーナー

ファシリテーター

グループC	林 良子 齋藤 恒光
グループA	松木 秀男 行徳 幸子

グループワーク時は

グループA：
渡邊、大橋、高田、斎藤、林、白岩
グループB：
岡村、松木
グループC：
笠原、山本、行徳
(欠席：館林)
へグループ変更

事務局 (復興推進課)

七電(ン源財) 網
タ地) 橋 細 澤 蔵
一域 薫 奈 々 孝 紀
振興 靖 治 紀

受付

報道関係者 傍聴席